

絵入浄瑠璃本「日本九ほんのじやうど」

横山, 正

<https://doi.org/10.15017/12253>

出版情報 : 語文研究. 22, pp.48-51, 1966-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

絵入浄瑠璃本 「日本九ほんのじやうど」

横山正

この浄瑠璃は今まで名も知られておらず、古浄瑠璃年表類にも見られない。「念仏住生記」(大原問答)の「九品の浄土」(「竹子集」にも所収)とは全く異なるものである。かなり多くの落丁がある不完本ではあるが、貞享頃の出羽掾座の一端を示すものであると思われるので、次に紹介する。簡単に書誌を記す。

装幀 半紙本。縦二一・三厘、横一六厘。表紙は単色がかつた黒無地。

題簽 欠

内題 第一 日本九ほんのじやうど

行・丁数 一七行、実丁六丁半(落丁、数丁)

挿絵 見開一ヶ所、半丁三ヶ所(半丁のものは元來見開で、

半丁が落丁したものと思われる。)

丁附 板心。「九ほん 三」「九ほん 四カ」「九ほん 五カ」

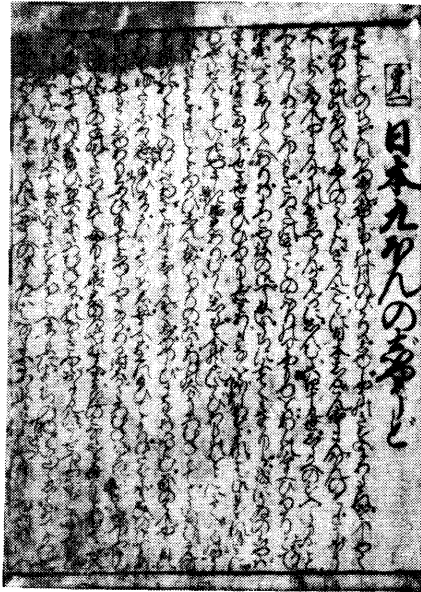
刊記 欠
四 (以下欠)。
二 「九ほん 十三」(次、絵半丁欠カ)「九ほん 十
(この間、五丁欠)「九ほん 十一」「九ほん 十

本文の節附には次のものが見られる。

上おろし・ふしゆり・ふし・ふしおとし・ひやうし・一つ
ひやうし・おすふし・くり上ふし・上ふし・うれいふし・
うれい・三重・ヲクリ・くり上・上・下おん・おとし・地
・いろ・ことハ・地ハリ・はつミ・二つはつミ・引取・か
ゝり・つきゆり・ぎんかハリ

次に本文の残存部分により梗概を記す。

(第一)讃岐国多度の郡の領主あとの太夫広足には、北の方死去し、あこや姫があった。広足の甥あとの大かうたつむねは悪事を好んだ。たつむねが捕えた鷹の子を、姫は母の供養のため、たつむねの恋慕を利用して貰い受け、空へ放して自室に



「日本九ほんのじやうど」1オ

逃げる。騙されて、たつむねは怒る。姫は或る夜更け、月を隠そうとする雲を招くと、その中から神童が現われ、姫と契を結び、真言の秘密をこの地に広めると語って雲井へ去る。姫は身重となる夢を見る。(次の落丁部分は絵によると、あこや姫の産んだ若君即ち後の空海をたつむねが谷に投げ落とし、松の枝にかかったところを、以前あこやが助けた鷹が救い、入唐僧の船に落として助ける。若君は入唐して修業し、文殊菩薩を直に拜む。)帰朝後、母あこや御前が斬られて死んだのを空海は文殊菩薩から授かった法力で生きかえらせる。母は空海を仏と拝み、空海は母を輿に乗せて寺へ帰る(以上第三まで)。(第四)空海の法力が宮中に聞え、召出される。禁裏の祈念僧、山階寺



「日本九ほんのじやうど」1ウ・2オ

守敏僧都はこれに反対するが、空海は真言を説き、守敏と法力を争って勝ち、小僧都の位を与えられる。その後、早魃が続き、帝より空海と守敏とに雨乞いが命ぜられる。守敏は雨を降らさず、空海の法力で雨が降る。怒った守敏は空海調伏の祈を始め、空海もこれに応じて守敏調伏を激しく祈る。守敏の檀上に降三世明王が現われ、空海を智慧の矢で射るが異状なく、空海の檀上に大威徳明王が現われ、守敏の首を神通の鎗矢で射切る。(第五)弘法大師は高野山に伽藍堂塔を建立、日本九品の浄土を実現する。大唐五大山より投げられたさんごが松の梢に止まって光る。空海悦び、ここで坐禅を組む。都では、あこや御前が生前もう一度空海に会いたく、高野山に登ろうとすると雷電がとどろく。空海は霊山に女人は登れないと母に語るが、母は承知しない。空海は袈裟を七つにたたみ、この上を越えて異状がなければ登ってよいと言う。母がそれをまたぐと、既に止まって久しい月経が袈裟の上に落ち、袈裟は火焰となって空に上り、火の雨を降らす。母は女の身を歎くので、空海は山神を祈って母を山の腰まで上らせて住ませる。これが女人堂である。悪運強いたつむねは未だ生存し、山野に迷い、高野山に来る。

(以下欠。絵によれば、たつむねは天狗に殺される。)

さきに挙げた節附を見るに、角太夫、治太夫、一中などの節附に類似している。然し細かく見ると、必ずしも同一と言えない。これに対して、貞享五年(元禄元年)の伊藤出羽掾正本「七夕之本」^地その他の出羽掾の節附と比較してみると、完全に一致し、両者一体であることを明示している。従って節附の面より見る限り、「日本九ほんのじやうど」は出羽掾の正本とみて間違ないであろう。

次に梗概でも明らかのように、弘法大師の真言の大法を讚美し、高野山を日本の九品の浄土と讃えるものであって、この類似の浄瑠璃としてよく知られているものに、相模掾(角太夫)正本「弘法大師誕生記」(貞享元年)と加賀掾正本「以呂波物語」(貞享元年)とがある。この二作品は共に貞享元年三月に東寺で行なわれた弘法大師八百五十年忌法要の際、相前後して初演されたものである。先ず「弘法大師誕生記」を「日本九ほんのじやうど」に比較するに、冒頭の部分(約二行ほど)は両者殆んど同文であり、それに続く部分も、かなり類似している。また姫が神童と契る部分も次のように同文とも言えるほどの類似を示している。

まちゑて出る月かけの、ほの／＼と見ゆる其けしき。けにもゑならぬ心ちして、ことを引よせ……………かゝる折ふしさしもくまなき月かけを、又たつくものおほはんとす。姫君御てをあげ給ひ。しばしとまねかせ給ひければ……………(日本九ほんのじやうど)

まちゑて出る月かけの、……………きらめきわたる其けしき。げにもゑならぬ、こゝちして……………ことひきよせて……………かゝる折ふし、さしもくまなき月かけを、又たつくもの、おほはんとす。姫君あふぎをあげ給ひ。しばし／＼とまねき給へは……………(弘法大師誕生記)

これは一例を挙げたに過ぎないが、この類似だけでも両者の密接な関係は否定できない。

次に「日本九ほんのじやうど」と「以呂波物語」とを比較するに、冒頭の部分から両者別文ではあるが、「以呂波物語」の

中核をなしている空海の渡唐・高野山草創・守敏との雨乞いで
の法力争いなど、すべて「日本九ほんのじやうど」でも亦、重
要な趣向として描かれている。更に次の部分などは両者同一内
容を殊更、多少でも表現を変えようとした跡がみられる。

あまりにつよくいのられて・しゅびんそうづのだんのうへに
は・かうざんせ明王あらはれ給ひ・大ひの弓にちへのやをは
けはなし給ふが・……（日本九ほんのじやうど）

あまりにつよくいのられて守敏のだんには大。るとく明王空
海のだんには。がうざんせ明王光をはなつてあらはれ給ひ大
悲の弓にちゑの矢を。さしつめ引つめはなし給へば……

（以呂波物語）

これらから見ると、「以呂波物語」と関係あることも亦、否
定できない。そして筋の構成は「日本九ほんのじやうど」の前
半が「弘法大師誕生記」の前半と類似しており、「日本九ほん
のじやうど」の後半が「以呂波物語」に似ている。ここで「日
本九ほんのじやうど」と右の二作品との前後が問題となるが、
信多純一氏は古典文庫の「山本角太夫について」の中で、角太
夫と出羽掾座との関係にふれて、早くは角太夫の語り物が出羽掾
の影響を受けたが、延宝末頃からは両者何れが先行かわからな
くなり、元禄になると角太夫の先行が明らかになり、この期の
出羽掾の正本は藤九郎版が多いことを論証されている。然も「
日本九ほんのじやうど」も他の二作品同様に、弘法大師の威徳
の讚美を中心とするもので、大師八百五十年忌の貞享元年から
あまり遠く隔たるものとは思われない。とすれば出羽掾のもの
と推定される「日本九ほんのじやうど」は、その前半を「弘法

大師誕生記」の前半に拠り、その後半を「以呂波物語」の影響
に拠ったものとみるべきであろう。更に節の点でも角太夫節の
特徴である「うれいふし」「うれい」が「日本九ほんのじやうど」
に見られることも、本文の類似と共に角太夫（弘法大師誕生記）
から影響をうけていることは明らかである。即ち「日本九ほん
のじやうど」は、弘法大師八百五十年忌に際して貞享元年に相
前後して初演されたとみられる「弘法大師誕生記」と「以呂波
物語」とをとって、それぞれ一曲の前後に配し、第五に高野山
の霊場を日本の九品の浄土として大きく描き、母をも絡ませて
聖域を強調して真言の秘密を描き、右二作品に続いて八百五十
年忌を余り遠ざからぬ時期（貞享年中）に年忌興行の一つとし
て上演されたものと推定する。ただこの時期の本書の版元も既
に、元禄同様に、正本屋藤九郎であったか否かについては疑問
を残しておきたい。何れにしてもこの本は、出羽掾座が京の角
太夫の浄瑠璃や曲節をとるだけでなく、同じ京の加賀掾の語り
物をもとりいれた時期の出羽掾座の浄瑠璃であることを示して
いる。